

うたの☆プリンスさまっ♪ All
Star : 可愛い後輩ちゃん♪

神籬

ここ最近、大抵のオフに最近は音やんと一緒に過ごすことが多くなった。もちろん同室で一緒に過ごしていたから、という理由で仲良くなった経緯もあるんだけど、やっぱり音やんは素直だし純粹だし、何より先輩として僕をすごく尊敬してくれるかわいい後輩ちゃん。

でもそんな音やんがこのところ様子がおかしい。実はこのところではなく最初出会ったときからおかしいな、とは感じていたんだけど、音やんからあの子を紹介してもらってから、様子がおかしい理由がわかった。

「嶺ちゃん、彼女が僕たちの曲を作曲してくれてる七海春歌だよっ」

「い、いつもお世話になってます。七海春歌です」

「うんうん、後輩ちゃんのこと僕、知ってるよ。改まって紹介しなくてもだいじょうぶい☆」

「うん、でも嶺ちゃん、あまり七海と喋ったことないかな？ って思ってた」

「そりゃあ、一緒に仕事したことないもんね〜」

僕は七海春歌を見つめながら、この子があの曲を作ったのかと今更考え込んだ。普通の女の子に見える。まだまだ僕より若い。何しろ17, 18歳くらいだっていうんだから、もうフレッシュフレッシュ！新鮮さがまた僕とは違う。

「どうしたの嶺ちゃん、黙りこんじゃって」

「いやあ〜〜〜〜 あんまり考えたくないこと考え込んだだけ☆ 今日は皆オフなんだね」

「そうなんだ、ここのところ七海も忙しくてオフがなくて、久しぶりの休みだっていうんだから声かけたんだ」

「ええ、久しぶりの休みなのか？ 売れてるね〜、っていうか、そんな貴重な休み、僕なんかと一緒に過ごしていいの、音やん？」

「え、嶺ちゃんどういう意味？」

「だからさ、ふたりきりで過ごさなくていいの・・・？って意味！」

「私こそ、一十木さんと寿先輩に勝手に割り込んでしまって申し訳ないです」

「後輩ちゃんが気にすることないよ？ ね、音やん♪僕がもっと気をつけてあげればよかったなあ」

「嶺ちゃん！！ そ、そーいーうこと言わないでよ！！」

ようやく僕の言わんとする意味に気づいて、音やんが首から頬、頭のとっぺんまで顔を真っ赤に染め上げる。うーん、わかりやすいなあ。でも、後輩ちゃんは全然気づいてない様子。僕の言ってることも、そもそも「一十木くん」って呼んでるからまだまだ2人の仲は進んでないみたいだね。

そうやって音やんをいじりながら楽しんでいたら、急に音やんの携帯電話が鳴ったようで、あたふたしてる。

「席外して電話でたら？ お仕事の話かもよ？」

「あ、は、い！」

携帯電話をお手玉しながら慌てて音やんが席を外す。ほんと一に、目が離せない弟みたいな存在。いつまでも世話焼いてないと心配でこっちがどーにかなりそうだ。ふう、とため息をつく、もう一人の後輩ちゃんがちょっとはにかんで笑った。

「寿先輩、一十木くんのお兄さんみたいです」

「あはは、そう思う？ 僕も今まさに同じこと感じてたところ。も一お兄さん心配で心配でさあ」

「はい、お二人を見てると、こう・・・家族って感じがします！」

「あ、後輩ちゃんはさあ兄弟とかいないの？」

「私、1人っ子で。だから兄弟がいらっしゃる方とか、余計にうらやましくなるのかもしれない」

「あはは、そっか。僕は姉ちゃんがいるんだけど、これがまた怖いお姉ちゃんね。姉ちゃんじゃなくて、もっと威張れる弟がほしいな～って思ってたところに音やんがやってきてもう嬉しいのなんのって」

いつのまにやら僕が音やんをいかに可愛がってるか、という話に発展して会話が弾む。この子、よく笑うし、笑ってくれるとなんだかとても心が和らぐんだな。いつの間にかすっかり後輩ちゃんのペースだ。

そんなこんなで音やんが頭を下げながら戻ってくる。

「どうしても今日じゃないとだめっていうスケジュールが入っちゃって。嶺ちゃん、七海、ごめん、僕これから仕事行かなきゃいけないみたい」

「ええ～！ 音やん、せっかくとれた休みだったのに！・・・と、まあ、お仕事なら仕方ないなあ。気をつけて行っといで」

「一十木くん、頑張ってくださいね！」

「うん、頑張るよ！ 楽しみにしてた仕事だから・・・断りきれなくて。あ、七海、僕がいなくても大丈夫？」

「音やん、後輩ちゃんは僕がちゃーんと面倒見るから大丈夫！ ちゃあーんと察にも送るしねっ☆僕のマイカーで♪」

「そうだね、嶺ちゃんがいれば迷う心配もないよね。ごめんね、また今度遊ぼう！」

あらら、音やんまるで警戒心ナッシング。僕だっていちおう、男の子なんだけど。ま、信頼されてるってことなのかな？ 逆に・・・？ 後輩ちゃんも警戒心ないし、どーも真面目な子ばかりだね。僕もだけど。

「さーて、後輩ちゃん、これからどうする？ そーだね、ドライブでもどう？」

「は、いえ、あの、私、その」

「ま、ま、時間もあるし♪ 普段全然喋らないんだから、お話もっと聞かせてよ」

すっと席を立ち、僕は後輩ちゃんの両肩にとんとんと手を置いてから、そっと車へエスコートした。

「どうぞ、僕の車にマイ・ガール」

そうして後輩ちゃんも僕は助手席に乗せると、自分も運転席へ。うう、なんだ、急に緊張しはじめた。よく考えたら家族以外の女性が乗るのって初めてだし、それも音やんがおそらく好きな女の子。罪悪感がMAX！MAXな嶺ちゃんだよ！

「可愛い車ですね！」

「でしょ！ んも一、僕も一目惚れでさあ。後輩ちゃんもわかってくれるんだ♪ 僕この車大好きなんだよね」

緊張してるといいながらも、素直に車を褒めてくれる後輩ちゃんの言葉に胸が踊ってしまう。この子はとても素直なんだ。心にすっと入るような。僕は行き先をあまり良く決めずにとりあえず車を走らせた。少し窓を開けて、風を呼び込みながら、車は滑りだす。

後輩ちゃんも風が気持ちいいのか、少し目を細めてた。それから、きれいな旋律が僕の耳に届き始めた。後輩ちゃんが小さな小鳥みたいな声で囁いてるようだ。

「・・・、それは新曲？」

「え！！ あ、もしかして声でてました！？」

「はっはっは、後輩ちゃんってそういう作曲の仕方してるんだあ」

「いつもこうじゃないんですう・・・ なんだかとっても気持ちよくなって、その、あの、」

「ん？」

「・・・寿先輩の運転する横顔見てたら、曲が浮かんできて・・・」

「え！？」

声があらぬ方向に裏返って、車も少し乱暴にブレーキを踏んでしまった。2人とも身体が反動で揺れてシートベルトにきつく抱きとめられる。

「ごめん！ ちょっとびっくりしちゃって、僕の、横顔を見てたって・・・」

「ごめんなさい、あの、私、男の人の運転する車に乗ることあまりなくてつい見とれてしまってた」

「見とれて・・・あはは、嬉しいことってくれるんだね後輩ちゃん！」

「思ったことをいってしまって・・・ごめんなさい」

「なんで謝るの？」

僕は車を海岸近くの駐車場に停めた。やっぱり女の子を連れてくるなら海だよ。なんだか本当にデートみたいだけど、僕はまだ後輩ちゃんのことをあまりよく知らないし、知ってどうすることもできない。

「とてもいい曲だった。僕も後輩ちゃんに曲を書いてもらえたらな・・・って実は皆を見てて思ったんだ」

「私が寿先輩に・・・ですか？」

「うーん、うん、あと皆に、かな？」

「えっと、先輩の皆さんで活動されてるユニットの・・・曲ですか？」

「そう。QUARTET☆NIGHT。最高のユニットだと思うんだけどさ・・・」

僕は運転席から降りて、後輩ちゃんの助手席の扉を開ける。少し歩こうよ、と声をかけて海岸脇へと釣れだした。

「なかなかメンバー皆がやる気がでなくてね。やっぱりいい曲ができないとやる気でないよね」
なんてわかりやすいおねだりをさりげなく僕はしてるんだろう。あのライブをみて、やっぱり僕はこの子が生み出す曲を歌いたいなんて思ってるんだろうな。

潮引く海の静かなさざ波に耳を傾けながら、僕はちらりと彼女を見た。

思案顔のまま、遠い海を見てる。「そう、考えこまないで」彼女を思案顔にさせた張本人である僕は軽く笑った。

「さっきの車で聞いた曲、近いうち聞かせてほしいな。いやーそれにしても、音やんに感謝しなきゃだね。紹介してくれなきゃきつこうして話をするのもできなかったよ」

「寿先輩のことはいつも一十木くんから聞いてましたが、やっぱり優しくて・・・」

「優しい・・・か、そうだね、優しい嶺ちゃんだからね～♪ なぜか周りの皆は僕に優しくないけど」

あはは、なんて笑って「帰ろうか」と後輩ちゃんに声をかけた。音やん、君が惚れた子はとってもいい子みたいだね。・・・あ、ダメだ、なんだかちょっと、心が疼く。もっと知りたい、もっとこの子の曲を聞きたい、歌いたい、なんて、恋の始まりみたいじゃないか。

「はいっ！」

彼女は屈託のない笑顔で僕のあとをついてきた。僕の難しい恋が始まりそうだ。とりあえず、後輩ちゃんをまっすぐおうちに送るのが今は一番大事。とは思うんだけどなぜか別れがたい。僕と後輩ちゃんの接点は今のところほぼない。彼女はスターリッシュの作曲家であって、僕たちとは先輩後輩の関係であるけれど、音やんたちみたいに直接の関わりあいはない。だからこそ今までお互いのことを知らなかったわけなんだけれど。知ってしまった以上、もっと知りたいなんて思うのはいけないことなのだろうか。

「後輩ちゃん、連絡先聞いてもいい？」

「・・・あ、携帯電話でしょうか？」

「そうだね、それがいいな。もしかしたら今後必要になるかもしれないし。お仕事で」

「そうですね！　じゃあ、私の携帯番号お教えします。メールアドレス・・・も必要でしょうか？」

「うん。お願い。僕のはこれだから」

突拍子もなく連絡先を交換することができた。仕事、というもっともらしい理由をつけて。

それから僕はズーッと携帯と睨めっこだった。今日も、テレビ局の収録で楽屋で待機時間があったのだけれど、一緒に出演するアイアイが珍しく不審がったくらいだ。

「嶺二、ずっと携帯見てるけどどうしたの？」

「ん・・・ん、いやそんなに僕携帯見てた？」

「見てたよ。何、オーディションでも受けて合否待ち？」

「違うんだけど、むしろ、僕から連絡するべきなんだけどっ。どうしてもできなくて。ああ、ああ、どうしたらいいのかな、アイアイっ！」

急に迫った僕に対してアイアイは無表情のまま対応する。「何、それどういうこと？ 連絡したければ連絡する。それ以外に選択肢ある？」

「あるんだよ、人には。連絡したくてもできない、そんな時があるんだよ！」

「面倒くさい・・・。そのテンションで仕事するときにも絡んでこないでね」

心底うんざりといった様子でアイアイはまた手にしてた雑誌に目を通し始める。一方の僕はまだ携帯を握りしめてる。

「嶺二、貸して。僕がかけてあげる」

その様子がよほどうざかったのか、アイアイに僕の携帯を取り上げられてしまう。ああ、返してっ！僕の携帯！

「七海・・・春歌？ ああ、スターリッシュの作曲家か。なんでこの子に連絡する必要があるの？」

「そ、それはもちろん・・・僕たち四人の、QUARTET☆NIGHTの新曲をこの子に頼もうとおもって！」

「ふうん、かけるよ」

え——！！ 結局かけるんかい！ あっさりとアイアイは後輩ちゃんに電話をかけたのでした！

一十木くんの次回の新曲、今日はふたりで細かいところを歌いながらチェックしています。歌い出しやキーの高さ、リズムの取り方、歌い方・・・そのすべてに対して、一十木くんは「七海と一緒に決めたい」というので練習室で打ち合わせをしながら特訓です。

「あれ、七海、携帯鳴ってるよ」

「あ、本当です・・・ええっと、寿先輩からです」

「ええ！ 嶺ちゃん？」

一十木くんは「なんで七海の連絡先を嶺ちゃんが知ってるんだろ？」と言いながら、電話にでた私に興味津々です。そしてすぐに「あ、僕邪魔だよ！ 一旦席外すね！」と本来は電話を受けた私が席を外すべきなのに一十木くんのほうが部屋から出て行ってしまいました・・・。

「もしもし」

「はい、嶺二、でたよ」

電話にでるとすぐに、寿先輩ではない・・・おそらく美風先輩の声が聞こえてきました。

「後輩ちゃん急に電話してごめんね！ お仕事中心？」

「い、いえっ。あ、打ち合わせでしたが、時間をいただいたので大丈夫です！」

「そうなんだ、ごめんね、手短かに話すね。今日の夜、時間あるかな？」

「はい・・・夜は特に予定はないです」

「そっか♪ じゃあお兄さんと何かご飯食べにでもいこうよ」

「えっえっ、あの、よいんですか？」

「もっちのロン♪ 奢るからさ。なんたって先輩だし！ あ。ごめん、僕もこれからお仕事なんだよね～ お仕事終わったら電話するから。待ってて」

「はい、わかりました・・・！」

突然のお誘い。唐突すぎてお断りするという考えすら浮かびませんでした。ご飯とっていただけ、もしかしたらお仕事のお話かもしれないし。

しばらくして一十木くんが「入ってもいい？」とドアの隙間から顔をだしてきくので、頷くとそわそわしながら部屋に戻ってきました。

「七海、嶺ちゃんなんだって？」

「ご飯を食べに行こうというお誘いでした」

「え！！！！？ ご飯！？ それってもしもしもしかして、え！？」

一十木くんの動揺が激しいです。なんだかとっても焦ってます。私も確かに突然の寿先輩のお誘いに焦ったりはしていたのですが、一十木くんは私のそれ以上です。

「え！？ なんで嶺ちゃん、七海を？ えー！？ え！？」

さっきから、え！しか発言しなくなってしまった一十木くん。まるで壊れたロボットです。そうしているうちに他の皆さんもお仕事を終えて帰られたようで。

「お、音也！ 練習してんのか？」

翔くんが私たち二人を見てそばによってきます。それでも一十木くんは手をいそぎんちゃくのように動かしながら、翔くんの問いに答えられないままです。

「なんだ、どうしたんだ音也は・・・？」

「あの、ちょっとありまして・・・」

「それにしてもこれは重症だぜ、おい音也！ どーした何があった」

「嶺ちゃんが・・・」

「ん？ 嶺ちゃんって、寿先輩のことか？」

「れいちゃんが、れいちゃんが、七海をデートに誘った・・・」

「はあ！？」

翔くんの顔色も一気に変わります。ただでさえ、一度感情に火がついたら誰が吹き消そうとしても消えない、そんな熱いホットな心を持ってる翔くん。あっという間に火がついたようでもう興奮して私へ迫ってきます。

「お、おいデートってどういうことだよ、お前OKしたのかよ！」

「で、デートというのは大げさかと・・・ こないだ新曲のお話をしたので、その打ち合わせだと思います・・・」

「・・・そ、そうなのか？ おい、音也、七海はこういってるぞ！」

「でもご飯ってデートだよねえ・・・」

一十木くんはまだ納得できないといったように顔をついに手で覆い隠してしまいました。

「あの人はそうやって茶化すところがありますから。デートとも限らないでしょう」

「トキヤ！ お前いつからそこいたんだよ」

「先程戻ったらあなたたちが騒いでるのでこのぞいたんですよ」

ふう、とため息をつきながら一ノ瀬さんは周りを見渡した。そしてさらにもう1つため息。

「大丈夫ですよ、あの人はこうやって皆さんに気軽に親しく話しかけてきますが。どこか心に壁がある。それを乗り越えさせようとは誰にもしないでしょう」

「・・・壁、ですか・・・？」

「そうです。・・・しかし、その壁さえも、もしかしたらあなたの曲なら・・・超えてしまうかもしれないですね」

「っじゃーそれじゃー意味ねーじゃんか！！！」

一瞬ほっとした顔をしていた翔くんも、その後続いた一ノ瀬さんの言葉にまた感情を爆発させる。

「とはいえ、このことについて私たちがどう論議しても仕方がないでしょう？ どう捉えるかは彼女と先輩次第なのですし」

「そう、そうだよ。僕たちが、どうこういうことじゃないよね・・・」

「まーアイドルは恋愛禁止だけどなっ！！！」

得意げにそう翔くんが締めましたが、すぐに三人は、はあ～と一斉にため息をつかれました。どうしたんでしょう、とても疲れてそうです・・・。

「七海、とりあえず今日の打ち合わせはここまでにしようか」

「あ、一十木くんごめんなさい・・・言われたところはすぐに直してきますから！明日また打ち合わせしましょう」

「そうだね。今日はこれからは・・・」

「よ、予定がありました」

「そうだったあ！ れいちゃんとだよね。うん、わかってる」

「も、もしよろしかったら一十木くんも一緒にどうですか?!」

「・・・それいーじゃん。仕事の話だろ？ だったら俺も行こうかな」

翔くんがなぜか乗り気になっています・・・。

「そうですね。私もこの後はもう予定がありません。私もご一緒してもよいでしょうか？」

一ノ瀬さんまで・・・!?

「翔とトキヤがいくなら僕もいくよ!!」

一十木くんも、一緒にきてくださるそうです。これは寿先輩も驚かれるのではないのでしょうか・・・。

僕はわりと心が広い。日本海よりは広いんじゃないかな。このまま成長すれば太平洋くらいの心の広さになるかもしれなかったけど、さすがに今日はそこまで心の広さを誇示することはできなかった。

「ごめんなさい、皆さんもご一緒したいというお話で・・・」

そういう後輩ちゃんの後ろには、さらに後輩ちゃんたちが三人。音やん、トッキー、と、この子はアイアイのとこの翔ちゃんかな？

「ううん、いいんだよー、けどこの人数じゃ僕の車には乗れないから、タクシーで移動しようか」

「七海とは車で移動してるんですか？」

おや、なんだか敵意たっぷりの視線を送ってくる翔くん。あはは、ムキになるところが可愛いねっ、僕ちん、こういう子好きだな。

「普段は、ね、ふたりきりのときも多いよ♪」

「な、なんで七海なんですか！ 先輩とは関係ないじゃないですか！」

「まあまあ、今日は皆と仲良くするためにご飯誘ったんだから、そういうのいっこなし。さ、タクシーきたから乗って乗って」

黒塗りのワゴン型ハイヤーを呼び出して僕は後輩たちを一気に車に押し込んだ。

後輩ちゃんのために予約した店は・・・こんな大人数じゃ使えないな、仕方ない。

「あれ、ここ、れいちゃんのおうち？」

音やんは何回もきたことあるからすぐに気づいたみたいだ。「い、え——！？」と素っ頓狂な声をあげる翔。なるほど可愛げがあるのやらないのやら。

「寿先輩のおうちにお邪魔していいんですか？」

「・・・すぐにこの人数で入れるお店が浮かばなくてねっ。ま、僕んちいつもパーティしてたりするから、それなりのものは揃ってるし、なんかケータリングでも取ってホームパーティとしゃれこもう」

ふう、と言い切って、後輩ちゃんのほうを見る。「皆さんでパーティ、楽しくなりそうです」とワクワクしてるようだ。ま、なんだかんだで仲良くなるにはパーティもいいしね～ ちょっと残念な気持ちを抑えながら僕は「でしょ！」と頷いた。

「適当に座ってて、あーそう、ちょっと急だったからあんまり綺麗にはしてないけど勘弁してねっ」

「あ、寿先輩、私手伝います！」

ちょこんと手をあげて後輩ちゃんが立候補してくれる。いいね、大人数の中のふたりきり。そういうのも悪くない、悪くない！

「あ、俺も手伝う！」

「あ、俺も俺も」

「もちろん私も手伝います」

「座ってて、っていつてるのに・・・君たちは何に張り切ってるのかな？」

まったく元気たっぷりの後輩ちゃんたちである。れいちゃんはスタートからすでに体力を半分を削られてしまいました…。

「そんなに手伝うことなんかないのにい～！」

ひとり暮らしの狭いキッチンに5人。しかも準備するのは飲み物くらいなもの。これだけ人数がいるとさすがに動きもまごまごするので、僕は名指しで2人遠ざける。

「翔ちゃんと音やんはそこにケータリングのメニューあるから適当なもの注文しといてよ～。で、トッキーと後輩ちゃんと僕は軽くおつまみでも作ろう♪」

「おつまみ、ですか？」

「えーと君たちはまだ未成年だっけ・・・こんなところで歳の差を感じるなんてれいちゃん悲しい」

改めて彼らの若さという事実に僕はもううなだれる。全身全霊をかけてうなだれる。すると後輩ちゃんは「先輩だって私たちと変わらないくらい若いですっ！」と励ましてくれるけど、もう年の話って、いくら励まされてれも、その差を実感するしかないんだよねえ～。トッキーは勝手に冷蔵庫をあけてもう料理はじめちゃってるし、も一皆マイペース☆

「れいちゃん、注文終わったよー！」

「俺たちも手伝う！」

さっさと自らのミッションをこなした一番ややこしい2人がまたたく間に戻ってくる。ますます混乱する！「・・・じゃ、なんだかトッキーがおいしいおつまみ作ってくれるみたいなので。残りはリビングにいてお話でもしよう」

「私、一ノ瀬さんのお手伝いします」

「七海さん、いいですよ」

あー——— そのシチュエーションは僕が望んだものなのに！ここは僕の家なのに！？なぜ願いは叶わないのか・・・ま、長い事彼女たちと付き合いが深いんだからこの差は仕方ないのかな。

音やんと翔ちゃんの肩を掴んで、「よーし、僕たちはあっちで楽しいお話しちゃうぞ☆」とリビングへ退散。2人は「俺も手伝う！！」と暴れたけれど、先輩権限で確保完了。大人しく入れてくれたお茶でも飲みましょう、そうしましょう。

「・・・寿先輩、もう1回聞いてもいいですか？」

翔ちゃんがアルコールが一滴も入ってないお茶で酔っ払ったふりをして僕に絡もうとしている。もろバレだぞっ☆

「なんで七海なんですか、先輩たちだったらもっと違う・・・作曲家いるじゃないですか」

「ええ～ 後輩ちゃんは君たち専属の作曲家なの？ 違うでしょ？ 彼女はシャイニング事務所の作曲家なんだし、僕たちの曲書いてもらっても全然問題ないじゃない？」

「・・・そ、その通りだけど。れいちゃんの誘い方に、、ちょっと問題あるっていうか！」

音やんもアルコールなしの麦茶で酔い始めた様子。なんてわかりやすい可愛い後輩たちなんでしょう。そしてこの子たちの中で後輩ちゃんは1人作曲してるのか。いつ襲われてもわからな

い獣たちの中に放り込まれてるようにすら感じるよ僕ちゃんは。

「誘い方～？ いきなり曲書いてよって頼んで出来るものじゃないでしょ？ もっと歌手と作曲家、歩数合わせてお互いのこともよく知って、それで作ってもらわないとだめだと思っ
てでしょ？」

「・・・う、確かに・・・」

「おい音也、何納得してんだよ！ 違うだろ！」

「翔ちゃん違うって何が？ 君もそうやって後輩ちゃんと仲良くなって自分らしい曲、書いて
もらったんでしょ？ れいちゃんだって書いてもらいたいんだいっ！」

「書いてもらいたいんだいっていわれても・・・」

「それにこの話はもうシャイニングさんに通してあるから問題なしなんだ～」

「ええ！？」

「僕は言ったらやるし、やるならちゃんと足場固めるし。真面目なところあるでしょ、ね」

同意を求められて困惑する音やんと翔ちゃん。きっと僕のこと四人の中でただの弄られキャラ
としか認識してなかったのかなっ？んっ？

「お待たせしました」

ちょっと空気の流れが止まったところで新しい風。さすがトッキー、いいタイミングできたね
。

「寿さんは、何かお酒を嗜まれますか？」

「え、僕？ 皆がお酒飲まないのに1人お酒はナシだよー！ 僕もシラフでいこーっと♪」

「そう仰るかと思ひまして、味はすべて少し薄めにしてあります。お酒と合わせなくても大丈夫
です」

「んもうトッキー気が利くね♪ これはよいお嫁さんになるね！」

「い、一ノ瀬さんがお嫁さんですか！？」

後輩ちゃんが目をぱちくりさせながら反応する。僕は、冗談といいながら「後輩ちゃんも手伝
ってくれたんだ？ 後輩ちゃんも気が利くし、いいお嫁さんになるよ」と頭を撫でたその瞬間。

「あ————！！！！」

と翔ちゃんが叫ぶ。返ってくるリアクションは容易に想像できるけど、実際に呼びこむと面
白い。この子はバラエティにも向いてるんじゃないかな。

ピンポンと呼び鈴が鳴ったので、「注文した料理かな？ 音やんとってきて！」と頼み込む
。「わかった、翔、いこう」と翔ちゃんを道連れに2人はまた玄関へ。

取り残されたトッキーと後輩ちゃんと僕は、静かな空気の中に身を置くことに。

「ごめんね、後輩ちゃん。今日はふたりきりって思ってたんだけどね」

「二人きりで何か打ち合わせをなさるおつもりだったんですか？」

あら？ まさかトッキーもそうなのお？ 皆でそうなのお？ なんだろうこの競争倍率の高さ
。もはや僕が手を出していい領域じゃないよねこれは。

「そう、打ち合わせ。新曲書いてほしくって！ トッキーは、音やんや翔ちゃんみたいに頭固い
事言わないよね」

「あの2人が何を言ったかは想像に難くないです、が……。まあ、私たちが口出すような範疇ではないですからね」

さすが大人です。芸能界を長らく経験していただだけあります。も一、音やんと翔ちゃんにも見習ってほしいもんだ！

「ですがアイドルは恋愛禁止ですから。二人きりで誘うというのも、誤解されますよ……」

目が。目が僕を心配してる目じゃないよ。明らかに後輩ちゃんのこと心配してるよね？ こういうときの感情はトッキーも隠し切れないんだね……。僕から言わせれば皆のほうが、まだまだ、なんだけど……。

「恋愛禁止なんて知ってるよ、たださえ芸歴長いんだから」

少し不満気味な声で僕は言ってから「やっぱりお酒が欲しいな、僕、お酒飲みたい」と半ばヤケ気味に言う。「寿先輩は、どんなお酒飲まれるんですか？」

「・・・僕、最近お酒飲まない。最近はほとんどお茶とか、健康志向。アイドルって怖いよ～、君たちも健康には気をつけなさい」

明らかにじじくさい発言をしてからもう僕は2人きりになれない時点でもう負けなのだと察していた。いつの間にか運ばれていた料理にも興味がわかない。音やんと翔ちゃんが美味しそうに食べている、その姿を見ればお兄さんは幸せだよーっと。

「寿先輩、その・・・」

少し音量を下げた声で、後輩ちゃんがふてくされてる僕に話しかけてくる。

「ん、なーに？」

「・・・新曲のお話なのですが、まとまってきたので今度またお時間とっていただけませんか？」

「・・・え？ ん？ 新曲・・・あ、ああー、うんうん。モチのロンだよ！」

すっかり料理に夢中な音やんと翔ちゃんは僕たち二人のやりとりには気づかない。こともあろうか後輩ちゃんから誘ってもらえて満足だ。その日がいつくるかについては現時点では未定だけれど、トッキーだけは僕たちのやりとりを見ていたような気もするけれど、それも一瞬の喜びにすべてを忘れて。

「盛り上がってるかーい！」

「わ、れいちゃん！」

「いやーそれにしてもよく食べるね、君たちふたり」

「先輩の奢りだからな！ 残さず食べないとな！」

それはそうだけど先輩本人に向けていうセリフじゃないぞ、翔ちゃん☆ランランだったら激怒かな、とおもったけれどそもそもランランが飯を奢るというシチュエーションが想像できないのでしたー。

「そんじゃま、夜も更けましたし。そろそろお開きにしようかな。君たち全員同じ寮なんだよね？」

僕は携帯を取り出してタクシーを呼ぼうとする。「寿先輩、大丈夫です！ 私、途中まで電車で戻れます。そこからタクシー拾いますから・・・」

後輩ちゃんがいきなり遠慮しだす。「気持よく先輩に奢らせるっていうのも、後輩の役目だぞ？」僕はその額を軽くつんと押して電話を続ける。残りの3人はベランダで星などを見ている様子。

「おい、トキヤは寿先輩が七海ちょっかいだしてるのどう思ってんだよ」

「翔、声が大きいです」

「今聞かずにいつ聞くんだよっ、七海が取られちゃうかもしれねーんだぞ」

「・・・とられる、先ほどの寿先輩のお話聞いてましたか？ 事務所は同じなんです、とられるも何も最初からないんですよ、それは・・・」

「・・・でも、絶対、れいちゃんは七海に気があるよ！」

「音也、君までそんなこと・・・」

「トキヤだってそう思うからついてきたんでしょ？ そうでしょ？」

音也は七海のことになるといつも見境がなくなるのはこの場にいる3人全員感じていることだ。こんなにあからさまに好いてる人間が他にいるだろうか。というかここにいる全員ライバルなのに、スターリッシュというアイドルグループでつながっている、そして彼女の曲で繋がっているという事実が、不思議な連帯感を生んでいる。

普通、人を好きになったら独り占めにしたいものなんじゃないのか？

そう思うことだって3人にはある。もちろん今、この場にいる3人以外もそう感じてる。それでも彼女の作る歌が、曲が、スターリッシュ全員の気持ちを1つにしてしまう。中々一歩を踏み出せないのだ。

「呪縛みて一なもんだよな」

翔が言う。その一言に、残りの2人は頷く。

「言ったらきっと今までのすべてのことが壊れちゃう気がする」

「でも、れいちゃんにはそういうの関係ないからね・・・」

「私たちですらここまでお互いの距離を縮めるの大変だったのに、彼は関係なしにぐいぐいきますからね・・・」

「やっぱりトキヤも狙ってるって思ってんじゃねえかよ」

「そりゃそうでしょう、あんなあからさまの誘い」

「でも問題は本人が気づいてねーってことなんだよなあ！」

ああ、と翔が頭を抱えてうめき声をあげた瞬間に、噂の当人がベランダに顔を出した。

「今タクシーよんだから！ 皆心配せずに乗って帰って行ってねん♪ そしてこれからもよろしくマッチョッチョ☆」

「ありがとうございます・・・今後共よろしくお願いします」

「れいちゃん、今日はありがとうー！」

「うまいもん食わせてくれてありがとうございました！」

お互いの戦いが始まる、これが初めての挨拶だったのかもしれない。

あの不思議なメンバーでのパーティから暫く経った後、待ちに待ったあの日はようやくきた。新曲が固まってきたという後輩ちゃんと僕とふたりきりで打ち合わせをすることになったのだ。

しかしあくまでも仕事、仕事、仕事なのだから・・・というか一緒にする前からこんなふしだらな気持ちでいるって俺、最低だよな。自己嫌悪だ。

時々こうやってたまらなく自分が嫌になる。人を好きになる資格なんてないんじゃないかと思う。それでも彼女の曲を聞いてたらそんな辛い考えも捨てられるんじゃないかって思った。結局のところ救いを求めているだけなのだ。自分のトラウマ、忘れられない記憶、過去から。

「あの、寿先輩・・・近いです」

「ん？ 何が～？」

「か、か、お、お、お顔が、です」

「あっはっは、照れてるんだ、後輩ちゃん、そういうところもかわいいよね」

さっと楽譜に目を通して曲のイメージをつかむ。ふうん、こういう曲も書けるんだ♪ 僕は好きだなー、うん、いいな。

「気に入っていただけで嬉しいです！」

どうやら声にもでていたようで・・・もちっと先輩らしく駄目だししようとおもったのに、最初から骨抜きにされてるんじゃあどうも締まりがないよね。こういうのならアイアイのほうが断然得意だ。冷静沈着に欠点を指摘していく。そこが冷めてる、怖いなんていう印象を受けてしまう欠点なんだけれど。

「実はデモ曲も今日持ってきていて」

「僕イヤホン持ってるから、後輩ちゃんも一緒に聞く？」

「え！」

「遠慮することないよ～一緒に聞こうよ、ね」

いうが早く、僕は素早くイヤホンを取り出すと後輩ちゃんの片耳にはめこんだ。自分の耳にも放り込んで曲が流れるのを待つ。「あ、では、鳴らし、ますね」

すこしぎこちない様子で後輩ちゃんが流し始める。イントロから始まり、曲が流れていく。大体想像していた通りの運びだけど、歌うとなるとやっぱり調整が必要かな？そして僕は気づく。

「これ、もしかして4人で歌う感じ？」イヤホンを外して後輩ちゃんに尋ねると「そのつもりで書いてしまいました・・・」と申し訳無さそうにする。

「いやいや、いーんだよ！むしろ、四人のために書いてもらえるなんて思ってもしなかったもん！」

「先輩方にお会いしてその、皆さんの特徴を活かして曲を書いてみたいと思ってしまって・・・」

「じゃあこれ、アイアイやランラン、ミューちゃんにも聞かせないとだねっ」

「あ、アイアイ、ランラン、ミューちゃんですか・・・」

「え？ん？僕はみんなのことそう呼んでるんだけどなんか変だった？」

「い、いいええっ、皆さんのイメージとは、ちょっと離れてるな、と・・・」

「ええ～ 皆可愛い名前呼び合ったほうが仲良くなれると思わない？」

「寿先輩はみなさんからなんて呼ばれてるんですか？」

「僕？ 僕は～・・・ れいちゃんって呼んでほしいけど皆、嶺二か寿だねっそういえば」

「でも一十木くんは、嶺ちゃんって呼んでますね」

「音やんとはベストフレンドだからねえ～。あ、後輩ちゃんも僕のこと嶺ちゃんって呼んでいいんだよ？」

「私もですか！？ いえ、そんな先輩にそんな！」

「それとも嶺二って呼んでくれる？」

「え・・・」

「あはは、冗談♪ 後輩ちゃんが好きな呼び方で大丈夫だよん」

びっくりして顔赤らめる後輩ちゃんをからかうのは楽しいけど、なんだか仲が深まる予感は一切ナッシング！ まあ時間は有限だけど、ゆっくり、ゆっくりね。生き急いだってしかたない。

「ではもしよろしければ先輩方全員と一緒に聞いていただける時間をとっていただいてもよいでしょうか？」

「皆、忙しいからね～・・・ ま、ここは僕にまかせてよ☆ 調整して連絡するからさ」

「はい！ どうかよろしくお願いします！・・・では、私はこれで」

「待ったー 待った待った！ こないだの食事いく約束覚えてる？」

「あ、皆でパーティになる前にお誘い受けた・・・」

「そ、覚えててくれたみたいだね！ 今日良い曲聞かせてもらったお礼に嶺ちゃんがおごっちゃうよ」

「そんな！ 奢っていただくなんて・・・」

「前も言ったけど、先輩に気持よく奢られるのは後輩の努めだよ。よし、行こう、さあ行こう！」

よし、行こう、さあ行こう！　なんていう先輩の声を聞いてそのままふたりきりで出かけることになり。だけど実は、曲を夜遅くまで書いていたせいでものすごく眠いんです、と断るわけにもいかず・・・！気づいたら、目の前は真っ暗、闇の中・・・心配そうに「後輩ちゃん！」と呼びかける寿先輩の声も届かず、気づけば・・・

「あっっっ！！！！」

急激に今までの流れが走馬灯のように頭を駆け巡り、そして意識を取り戻す。いわゆる、見知らぬ天井。そして見知らぬ、毛布、布団。私寝ちゃってた・・・？

「女の子が男の前で無防備になったらダメだよ？」

扉が開いて、暗闇に染まっていた部屋に光りが差し込む。むかひの部屋にはなんだか記憶があるような・・・。

「寝不足だったんだね、ごめんね気付かずに無理に誘っちゃって。車に乗った途端に寝ちゃうんだもん、びっくりしたよ」

苦笑いでベッドに腰掛けたのはほかならぬ寿先輩だった。そして私にマグカップを手渡してくれる。

「お水だよ、ずっと眠ってたから喉乾いたでしょ？」

「ああああ、あああ、私、本当に本当にすみません・・・！」

「気にしない、気にしない！　元はといえば曲を頼んだ僕にも原因はあるし、あ、でもちゃんと睡眠はとらなきゃだめだよ。プロなんだからね」

ちくりと寿先輩の言葉が胸に刺さる。「体調管理もプロの仕事の内。どーしよーもないときには・・・先輩後輩友達関係なしに誰でもいいから頼るんだよ。・・・君は1人じゃないよ」

ぽんぽんとごく自然に頭を撫でられる。

「あ」

その手を宙で停めて、「僕、なんもしてないからね？」と寿先輩は一言付け加えた。意味がわからず、つい聞き返してしまう。「してない・・・というのは？」

「だからあ、やましいことはなにもってこと！　今日は一晩、そこで寝てていいからね。僕はリビングにいるから、何か困ったら声かけて。今は考えずにゆっくり眠ること。以上、では解散」

「・・・」

「・・・ん、えーと、後輩ちゃんどうしたの？」

「はっ・・・いえ」

つい反射的に部屋を出て行こうとする寿先輩の背中に手を伸ばし、シャツをつかんでしまっていた。

「どうしたの？　どこか痛い？」

ん？と無邪気な顔で寿先輩がのぞきこんでくる。「いえ、違います・・・」

「じゃあ離してくれないと僕、部屋出れないよ？」

「わかってます・・・」

「・・・ん？ どったの？ ・・・お話聞こうか？」

「いえ・・・その、恥ずかしいです・・・けど」

「いいよ、嶺ちゃんになーんでもいってごらん。聞くよ。今日は君だけの嶺ちゃんだ！」

「・・・寂しくて・・・」

もう少しすれば寮生活から一転、ひとり暮らし。仕事のために、今よりいっそうピアノに向かう日々。一緒にの寮でも、デビューしてからは忙しい仲間たち。ゆっくりする時間もなく、ただ流れていく時間。そんな中、ほっとする人のぬくもり。寿先輩の優しさ、言葉、染みわたるその全てがまた遠ざかってしまうのが寂しくて、つい・・・。

「そっか。そうだね。つい皆、プロだって言葉で厳しくしてしまうよね。後輩ちゃんだって、1人の人間だから、寂しくなることだってある。そしてそれは恥ずかしいことでもなんでもないよ」

「はい・・・」

「僕だって寂しくなるときだってあるさ！ 一緒に歌う仲間が、僕のことを嶺ちゃんって1人も呼んでくれなかったり、やたらツッコミが厳しかったり、さ・・・」

寿先輩はそんな風に励ましてくれてるけれど、時々見せる違う表情、寂しい表情は、今口で言っているようなことが理由ではない気がしていた。本心を濃い霧で包み隠すような、隠すためにあえて自分を明るくおどけているような。

「君の瞳」

「え？」

「その透き通るような君の瞳さ。僕の言葉じゃない、僕の心を視てる」

言葉心にあらずで見つめていた事・・・ばれちゃった？

「そうだね。僕は嘘をついてるのかも」

「嘘ですか・・・？」

「自分にも皆にも・・・そして君にも。どんな嘘かはもう、忘れちゃったけどね」

ふふんと自嘲気味に笑ってから、「さ、もうお眠り。嶺ちゃんは紳士だよ、安心して。ただ困ったことがあったらすぐ呼ぶんだよ」私の指から、寿先輩のぬくもりが離れていく。そして笑顔が、扉の向こうへ消えた。

突然眠ってしまった彼女の前で理性が保てたのは我ながら感心する。音やんたちが遊びにきたときも思ったけれど、部屋に誰かいてくれるのはやっぱりいいものだ。現場にいけば確かにたくさんの方がいるし、ライブにできればたくさんのファンの子が応援してくれる。それはすべて僕の力になって、エネルギーになっていくはずなのに、この部屋に戻って1人になると、やっぱり僕はひとりぼっちなんじゃないかと考えこんでしまう。

借りっぱなしだった映画をようやく見始めて、気がついたら終わっていて、何も映らないテレビの画面は呆けて見続けているこの現実こそが、本当の僕。暗闇から発する科学的な光りが僕を映してる。本当の僕を。

「・・・寿先輩」

「あれ、起こしちゃったかな？」

「いえ・・・その、まだ明かりがついていたので」

「寝なさいなんていって、大人の僕が寝てないんじゃお手本にならないよね。あはは、ごめん」

「あ、お気になさらないでください。ただ、その・・・」

「なあに？」

「寂しそうな・・・顔をされていたので」

「寂しそう？ 僕が？」

「わ、私の気のせいだったらいんですっ！ ただ、時々寿先輩はとても寂しそうな顔をされるから」

「から？」

「心配なんですっ・・・」

立ち上がって、僕はすぐに後輩ちゃんを抱きしめた。嫌がられるかもしれないなんて意気地なしの僕はココロの何処かで身を潜めたようで、心も体も、彼女を抱きしめたいってそう言っていた。

「心配してくれてありがとう」

「・・・あ、あの」

「ごめん。もう少しこのままでいさせて・・・」

「はい・・・」

力をいれすぎずに、ぎゅうっと。小さな彼女の身体を包み込む。寂しさを埋めるようにして、彼女の言葉に身体に甘えて、僕はゆっくりと眼を閉じながらただ抱きしめた。

「なんで君にはバレちゃうんだろうね」

「そろそろ、よ、よいでしょうか？ 恥ずかしいです」

「ん、もうずっとこのままでいたいけど、だ一め？」

「だ、ダメです！」

ぐいっと身体を引き剥がされてしまった。思ったよりも強い力で拒否することもできるんだな、と感心していると、「ここ、こういうことをされると困ります！」と説教をされてしまう。

「寿先輩はアイドルなんです！ アイドルの方は、やはり、こういうことをされると問題になるかと」

「アイドルは恋愛禁止って君も言うの？」

「アイドルの皆さんの大前提ですから！」

「